

氏 名 (本籍)	あさ の とも こ 浅 野 智 子 (東 京 都)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5450 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	近代都市と美術家についての研究 1910 年代から 1930 年代の東京を中心に		
主 査	筑波大学准教授	博士 (工学)	山 本 早 里
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副 査	筑波大学准教授	博士 (芸術学)	菅 野 智 明
副 査	早稲田大学教授		丹 尾 安 典

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

本研究は、近代化する同時代の社会相が東京という都市に投影されているという観点から、東京とそこにおいて展開された美術活動との関係を考察することで、日本美術における「近代」の一視座を提示することを目的としている。

### (対象と方法)

本研究では、近代都市と美術の社会的関係を考察する上で、都市に対する意識が大衆に芽生えたところから戦争によって壊滅的に都市が破壊されるまでの、明治後期から昭和戦前期までの東京を都市としての対象としている。大きく 2 面から論考が進められ、まず近代都市に対する美術家の反応として都市風景画の変遷と都市美運動への参加を取り上げ、次に近代都市が美術家の環境へ与えた影響として美術家の居住地の変遷と美術家コロニーの形成を分析している。

### (結果と考察)

第 1 章「近代都市東京の絵画化」では、明治前期の風景画は新奇な都市の建築物を個別に捉える名所絵的な風景表現が大きな割合を占めるが、明治期後半からは名所絵や山水画の絵画表現の制約から離れ、匿名実景を題材にした風景画を生み、都市風景画としては 1920 年代前後よりガード下や市中の停車場といった平凡な風景が絵画主題となっていくことを明らかにした。震災復興期における都市風景の大きな変貌は、モダンな都市景観だけでなく、そこに息づく大衆の姿も含めた都市風景画を展開させていき、松本竣介は 1930 年代後半になると無人の都市風景や都市景観を背景にした肖像を描いている。このように、風景および風景画の概念の変化の結果、都市風景画は誕生し、都市景観と都市に対する眼差しの変化の中で個々の建築を題材とする表現から都市全体を捉える表現へと変化し、モダン都市文化が隆盛する中で都市の大衆や文化をも対象としていった。東京の都市化が新たな絵画ジャンルとしての都市風景画を誕生させ、風景や都市に対する社会のまなざしの変化に伴ってその表現内容や画題を変化させていったことを指摘した。

第 2 章「都市の美観と社会参加」では一般的な都市景観に対する問題意識の高まりの中で、多くの美術家が 1920 年代から 30 年代にかけて都市美に関して言及していることを指摘し、都市風景画の展開において見

られた社会思潮の変化への美術家のもう一つの反応と捉えた。まず、1922年の『中央美術』の「都市生活の芸術研究号」が都市美運動の要因となったように、20年代から美術家が積極的に都市美に関わっていく過程を明らかにし、次に20年代後半から30年代にかけての都市美運動の実践例を挙げた。例えば石井柏亭は都市美協会に役員として長年にわたり関わり、巴里会では藤田嗣治らが中心となりみゆき通り美化運動という都市美の実践運動を展開している。さらに、日本の都市美には、都市をひとつの芸術作品として捉え、その全体的な建築物の構成や環境の美的な調和を迫及するシヴィック・アートの概念が含まれ、それにより都市美の思想に審美的側面が内包されていたことを指摘した。

第3章「美術活動の地域性と都市化」では、都市環境が美術家に及ぼす影響を考察する手がかりとして、都市化の進行する1910年代から50年代の東京における美術家居住地分布の変遷を分析した結果、関東大震災後の東京西部の郊外住宅地開発の進展と呼応するように、30年代から美術家の西郊外地域への移動が確認された。郊外開発や交通網の発達といった都市化だけではなく、帝国美術学校や多摩帝国美術学校などの美術教育機関の郊外地への移動や、ターミナル駅として発展してきた新宿などの地域に新たな美術展覧会場が開設されるなどの美術市場の移動と拡大を理由として指摘した。また、画塾では寄宿を基本とする美術教育がなされていたものが、西洋の美術教育制度が導入されたのに伴い、美術学生の居住地選択に自由が広がったことも居住地分布に関連することを合わせて指摘した。

第4章「都市における美術家コロニー」では、大正期から昭和戦前期にかけて都内に出現した美術家コロニーの設立経緯や思想的背景を調査し、近代都市と美術家の思想との関係を考察したところ、明治初期に生まれた東京美術学校や展覧会場地としての上野周辺に出現した地域的集合にすぎなかった駒込・日暮里・田端の「美術家村」に対し、明治中期には日本美術院派の集合、白馬会系洋画家の集合、帝展系洋画家の集合など美術表現や美術思想を共にする美術家集団が生まれ、さらに大正期に入ると、思想的共同体、共同制作を目指す理想郷的な美術家コロニー、例えば池袋モンパルナスや阿比良村などが登場したことを明らかにした。これには華族らによる地所分譲などの社会的動きや、パトロンによる土地提供や資金提供なども背景にあったことを指摘した。

終章では、以上を総括し、都市の近代化と美術家の活動や環境との関連性が明らかになったこと、この一背景として常に美術の社会性に対する意識が美術家にあったこと、近代化に伴う美術制度が美術を大衆から乖離させた反省から美術を大衆に回帰させる一志向として都市風景画や都市美運動を捉えることができること、一方で都市化によって均質化する都市空間の中で美術家として差別化を図ろうとする意識の表れが美術家の居住地分布や美術家コロニーから見て取れることを指摘した点が本論文の成果であるとした。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、近代と美術の関連を考察するために、明治期の近代化の象徴であった都市を取り上げ、美術家からみた都市、都市に対する美術家の活動、都市が美術家に与えた影響、都市における美術家の環境という4つの視点、つまり、都市風景画、都市美運動、美術家の居住地、美術家コロニーからその時代の美術とそれを取り巻く時代を紐解いており、これらの視点をういた点は独創的である。さらにその論証のために、都市風景画から文学まで幅広く資料を収集・考察しているだけでなく、美術年鑑の居住地一覧を丹念にデータ化するなど緻密に検討がなされている。美術家の居住地の変遷と他の職種のそれとの違いを明解にする必要があるなどいくつか課題は残されているものの、近代都市と美術との関連を明らかにした本論文の価値は高いと評価される。

よって、筆者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。